

• • もくじ •

目次 / 特集 グリーンランド・フェロー諸島

そうだったのか グリーンランド	1
直撃インタビュー 出稼ぎナース in グリーンランド	5
儀間晴香選手 ハンドボールを通して知るフェロー諸島	7
映画を通じた文化交流@グリーンランド、フェロー諸島	9
Greenland essay part.1 "Ane i pishuset Lunge-aedersken"	7
国立血清研究所 Statens Serum Institut(SSI)に行ってきました	11
オリンピック 大潟村	13
オリンピック新聞 ハンドボール	15
セーリング Sail GP オーフス大会	16
日本人会の活動 シニアの会	17

日本人会の活動 シニアの会 歌の会	18
デジタルイベント	19
日本人会の活動 シェラン 8月に歩く会	21
日本人会の活動 フュン BBQ	22
日本人会の活動 発掘勉強会	23
日本人会の活動 ユラン	25
デンマークの気になるお店 吉屋	26
デンマークの気になるお店 io (いほ)	27
ニュースヘッドライン DK	29
ふるさと県民 シリーズ6 奈良県編	31
大使館からのお知らせ	32
広 告	34

そうだったのか、グリーンランド

神谷麻由

グリーンランドには実は氷がいっぱい、アイスランドには実は緑がいっぱい。
日本ではそんな命名(迷名?)伝説話やトリビアに常連のグリーンランドかもしれませんのが、デンマーク女王のスピーチにも必ず言及されるようにデンマーク王国にとって重要な土地と人びとでもあり、今までの歴史も未来への関わり方も、常に注目の的となっているこのグリーンランド。

近年では、米国「グリーンランド買いたい」vsデンマーク「売らない」という一件や、つい今年8月下旬には、グリーンランドの山頂で雪ではなく雨が降る、しかも豪雨という前代未聞の現象が発生(温暖化急進と見られている)するなど、世界的ニュースも賑わせています。

前号までにはグリーンランド旅日記(Kyoko Rileyさん寄稿)として、グリーンランドで体験できるさまざまな魅力をみなさんに楽しんで頂けたかと思いますが、今回はグリーンランドの専門家・高橋さんとグリーンランドど素人の神谷で、グリーンランドについてみなさんとさらに深く学んでいける機会になればと思います。

「えっ?! 駅や街のあちこちでお酒を飲んで集まっている人たちは、アジアじゃなくてグリーンランドの人たちなんですか?!」私がデンマーク(オルボー)に移住してきてしばらく経ってから、初めてそれを知った時は驚きました。コペンハーゲン大学に留学していたころには、日本語学科で学んでいたグリーンランド人のチャーミングな女の子と仲良くなつたのですが、長い黒髪がきれいだったこと、アザラシの毛皮でできた手袋を愛用していた姿をよく覚えています。ただその友人のイメージと、住み始めてから街で目にする光景が一致しないことに戸惑いつつも、「グリーンランドとは?」という興味が大きくなっていくのを感じたのでした。

また日本のことをデンマークの人に説明する機会があると、北海道と沖縄は後に日本となった歴史の部分のお話をするたびに、デンマークにとってのグリーンランドとフェロー諸島のように感じる、という妙な感覚が。実際の大きさも歴史の流れも全く違うのは承知なのですが、例えば双方の隣国であるスウェーデンや中国、また他のどの国に対してもそんな感覚は持ったことがないので、こじつけかもしれません日本とデンマークの縁をそんなところにもこっそり見出したような気持ちが湧いたのです。

実はこの質問(この感覚・観点をどう思うか)を投げかけた最初の、この特集記事のインタビューのお相手は在デンマーク日本大使館の宮川大使。(!)「それは初めての視点で、とてもユニークな発想ですね。」と優しく対応してくださり、比較そのものは単純にはできないながらとされつつ、日本としてもデンマーク本土だけでなくグリーンランド、フェロー諸島との関係の発展にもさらに注力されていることを強調していました。日本を代表してのグリーンランドとの関係を見ていらっしゃる大使ならでは、エンガワ・甘エビなどの輸入元として、また気候変動の調査での協力関係など日本とグリーンランドの主要な繋がりを教えてください、(→今号の別記事「映画を通じた文化交流@グリーンランド、フェロー諸島」でも詳しく紹介!)今後も、水素・風力発電を含めた気候変動に関するコラボレーション及び社会におけるデジタル化の分野に関しても、ますます力を入れて進めていきたい、とのことでした。(今年2月25日開催、ニールセン北村朋子さん主宰のFOLKEという対話イベント内にて大使に質問させていただいたものを文面化したものです。)(次ページに続く)

そうだったのか、グリーンランド

(前ページより続き)

ここで登場していただくのが、オルボー大学でもグリーンランドを含む北極プロジェクト研究でご活躍されていた高橋美野梨准教授(現在は北海学園大学)。

神谷さん、ありがとうございます。皆さま、初めまして。北海学園大学法学部でグリーンランド・北極の現代政治を研究しております高橋と申します。今回はこれまでに示された、それぞれに魅力的で核心的な事柄の基底をなす、デンマークにおけるグリーンランドの「位置」について考えてみたいと思います。やや遠回りになりますが、こうした両者の関係の基層のようなところに目を向けてみた上で、最後に、時事的な問題に話題を移していきたいと思います。

その前に、少しだけ日本におけるグリーンランドの「位置」について確認しておこうと思います。皆さん、この冊子をご存知でしょうか(図1)。これは、1978年に創設され、日本で最も歴史ある北欧研究の学術団体、バルト=スカンディナヴィア研究会(以下、バルト研)が発行する学術誌『北欧史研究』の表紙です。この表紙には、「バルト=スカンディナヴィアという枠組の地域」(第8号「はじめに」1990年)を表す挿絵が添えられています。よく見てみると、グリーンランドは描かれていません。「バルト=スカンディナヴィア」の西側の輪郭は、アイスランドを包摂することによって同定されているようです。図法や縮尺の都合でグリーンランドを組み込めなかったという事情は推測されます。あるいは、バルト研の起点は、「バルト海周辺の北欧地域」(第1号「はじめに」1982年)を研究すること、そして結成当時の名称は「バルト海周辺地域研究会」(第6号「はじめに」1988年)であったということですから、地理的な境界を理由として、グリーンランドは意図的に外側に置かれた可能性もあります。しかし、グリーンランドが長きに渡りデンマーク(19世紀初頭まではデンマーク=ノルウェー同君連合)の植民地であり、時間と空間の両面でデンマーク史を形作ってきたことをふまえれば、なぜグリーンランドが省かれたのか、やや不思議な気もしています。40年を超えて、バルト=スカンディナヴィア研究をけん引してきたアカデミーの「顔」、その名も『北欧史研究』に、グリーンランドが不在であり続けてきたことを、私たちはまず確かめておきたいと思います。

それでは、デンマークの事情はどうでしょうか。デンマークでは

グリーンランドをどう位置付けてきたか、ということですね。この会報は、実際にデンマークに住んでおられる方々を対象に編まれています。デンマークを知る皆さんの中には、日々の生活の中で、自治領であるグリーンランドを身近に感じているという方も少なからずいると思います。他方で、デンマークに住んでいても、グリーンランドは遠い存在だと感じている方もきっといますよね。むしろこちらの方がマジョリティかもしれません。近いか、遠いかというのは主観の問題にすぎないので、深入りしても仕方ありませんが、この「距離」について、色々と考えさせてくれる文章があります。下に引用するのは、今年、創刊94年を迎えたデンマーク語のジャーナル「Økonomi & Politik」において、北極特集号(2021年第2号)が組まれた際に、コペンハーゲン大学政治学科教授のMartin Marcussenによって準備された「序文」の一部です。なお、この特集号には私の論文も掲載されています(・宣伝)。

多くのデンマーク人にとって、グリーンランドへの関心や知識は非常に限られたものだった。デンマークのいくつかの町では、伝統的にグリーンランドの町と姉妹都市提携を結んでおり、夏にはグリーンランドの小学生を受け入れてきた。これにより、デンマークの小学生は、王国が北極にまで続いていることを初めてかすかに実感することになった。しかし、こうした実感は、おそらくほとんどの場合、グリーンランドの子どもたちを何らかの形で手を差し伸べるべき存在、あるいは援助の対象という印象とセットになっていた。(中略)氷山のスライドや伝統的な太鼓踊り(ドラムダンス)が映し出される。グリーンランドは、明らかにデンマークの現実とかけ離れていた。グリーンランドは、デンマークの自己認識とは完全に関係付けられない場所として認識されてきたかもしれない。デンマークの政治家がグリーンランドについて語ることはほとんどなかった。「グリーンランド語のニュース」は嘲笑の対象でした。グリーンランド語はふざけた響きで、

風刺番組ではグリーンランド語やグリーンランズ人を揶揄してきた。デンマークの社会学者が、北極の研究に専念したことはほとんどなかった。グリーンランド研究は、アザラシ皮のコートを着た少数の熱心なグループによってなされた。



ナショナルデーを祝うグリーンランドの人たち

表現や、Marcussenの見立ての是非はさておき、私たちがまず注意を払いたいのは、この文章が、デンマーク語で書かれ、デンマーク人に対して発出されたということです。デンマーク人は、この文章をどのような気持ちで読むのでしょうか。実は、私は小学校・中学校の大半をデンマークの現地校で過ごしました。上の文章を読んで、まず私が想起したのは、私自身の経験、つまり当時私が通っていた学校(小学校は公立、中学校は私立でした)でグリーンラ

ンドのことを学んだり触れたりする機会があったかどうか、ということでした。私が全く勉強しなかった…、否、当時私が通っていた学校では、毎日森に出かけたり、海に行ったりしていて、座学での勉強をほとんどしなかったからかもしれません、当時グリーンランドのことを学んだ、あるいは同級生と話をしたなどという記憶はほとんどありませんでした。「ほとんど」というのは、先に神谷さんもご指摘されたように、駅や街で泥酔しているグリーンランド人のことがたまに話題にのぼったからです。その際に、少なからぬ同級生たちは、グリーンランドやグリーンランド人を自然化するような物言い、つまり、本来であれば固定的な「グリーンランド(人)」などというのはないはずなのに、十把一絡げに、当然「そこ」において、例外なく「そう振る舞う」存在として、半ば諦めにも似たニュアンスを伴わせつつ、彼・彼女らのことを話していたような気がします。少なからぬ同級生たちは、などと書くと、「じゃあお前はどうなんだ」となりそうですが、恥ずかしいことに、その当時の私はグリーンランド(人)に対する情報や知識が著しく欠けていて、そういうふうに、その場の雰囲気を同調しているところもあったように記憶しています。

いま、こうして、当時のことを思い出しながら、Marcussenの序文を読み直してみると、何か

をまなざすとはどういうことなのかについて、あれこれ考えてしまします。このとき、ジョン・アーリとヨーナス・ラースンが共著で出版した『観光のまなざし 増補改訂版』(法政大学出版局、2014年)は極めて示唆的です。彼らは、この本の中で、見える=まなざすということは人が学び取った、あるいは権力関係の馴化などによって構築された文化的慣習でしかない、と言っています。つまり、純粋で無垢な目なんてないんだということを彼らは言いたいわけです。が、ここで重要なことは、アーリとラースンがいうまなざしならぬものが、「わたし」の目に世界がどう映っているのかを表すだけでなく、「世界を整序し、形づくり、分類する行為」(p.3)という、より能動的なニュアンスを伴うものであるということです。「わたし」は、何かをまなざすことで、「わたし」の基準に沿う形で世界を整理整頓しているということのようです。そんなこと分かっているという方もおられると思いますが、Marcussenの序文に引き付けてみたとき、たとえばあのデンマークの小学生たちのグリーンランド(人)に対するまなざし、そしてそれは、今は大人になった「あなた」のグリーンランドに対する世界観が、誰によって形作られ、何によって権威づけられていた(いく)のか、そうした多様なまなざしが、グリーンランドとの関係の中で離合集散を繰り返しながら、ど

のようにして「デンマークの自己認識」(Marcussenの序文)の外側に配置されていくのかなどについて考える機会を与えてくれているように思います。

もっとも、既に神谷さんが適切に説明されたように、両者の関係を過分に二項対立的に捉えてしまうことも問題でしょう。実は、上で抜粋したMarcussenの序文は、「こうした認識は過去のものになった」と続きます。過去のものにするということは、ある種固定化された関係をリセットし、新しい文脈に接続させていくことに成功しなければなりません。そう簡単なことではありませんが、Marcussenは、その契機として、全地球的な環境問題の顕在化を挙げます。重要なことは、問題の顕在化が単に「環境」にかかるだけでなく、それを起点に、他の領域に波及していることです。その代表格には、グリーンランドにおけるウラニウムなどの鉱物資源開発や、グリーンランドの西側を通行する航路=北西航路の商業的利用可能性、あるいは北極の戦略的重要性に注目が集まるで

グリーンランドに設置されてきた米国の軍事基地(在グリーンランド・チューレ空軍基地)の価値がより一層高められる、などが挙げられます。



写真 上下とも ヌークの街並み

鉱物資源開発について少しだけ。議論は多岐にわたりますが、たとえばレアアース。現時点では、グローバルなレアアースの資源量に占めるグリーンランドの割合は3.44%(約489万トン)だと言われていますが、展開中の5つのプロジェクトの数値を含めれば今後数年のうちに、この数値は約3倍の9.16%になると言われています。あるいは、ウラニウムの事例では、その回収可能量の数値が明らかになっています。それによれば、現時点では102,800 kgU(金属重量)が回収可能と言われていますが、推定資源量125,100 kgUと合わせると、228,000 kgUになり、これは世界トップ10に入るということです。こうしたこと背景に、2000年代半ば頃からは、中国やロシアといった地域大国から直接投資の対象として熱い視線を注がれる対象になると同時に、数多くの外国企業がグリーンランドに進出しました。莫大な利益を生み出す可能性を秘めていることから、今年4月に行われたグリーンランド議会選挙でも大きく争点化され、国論を二分し、政権交代をもたらすにいたりました。

このように、機会の窓が開かれつつある中で、グリーンランドとデンマークの関係は、かつてないほどに流動化の様相を呈しています。私の専門が政治なので、とりあえず政治の動きにのみ着目すれば、要点は大きく2つあります。①グリーンランドは



資源開発で注目を集める町ナーサーク

デンマークからの独立を、②デンマークは国家としての利益や価値を共構築していくとする動きを見せている、ということです。①と②が協調的か、相反的かについて解を出すのは容易ではありませんが、大事なことは、(デンマークへの)統合か、(デンマークからの)分離かといった二項対立的な見方とは異なるところで、両者の利害が議論されているという点です。①は、いわゆる分離独立だけが争点に上っているわけではなく、たとえばフリーアソシエーションのような国家として独立しつつも、部分的にデンマークが管轄権を保持するような緩やかな連合関係の在り方も議論されています。この議論は、グリーンランドの経済的脆弱性を引き合いに出すことで、独立は困難だとする見方へのアンチテーゼとしても機能しています。グリーンランドは、2017年時点で、自身のGDP比25%、予算比59%を、デンマークからの経済支援(政府一括補助金)に頼っています。このことをもって、独立が困難だろうという見方がありますが、独立なるものが経済的な観点のみで判断されることに、少なからぬグリーンランド人は違和感を持って見ているようです。フリーアソシエーションなど、多様なオルタナティブの模索は、こうした独立に対する固定化されたイメージの払しょくと、現実路線から、将来選択の多様化を図ろうとするグリーンランドの意思が垣間見えるような気がしています。

②は、グリーンランドおよび北極全体の政治的・経済的ポテンシャルに対して、デンマークが国家としてどのような対応を採っているか、ということを指しています。端的にいえば、近年のデンマークは、北極国(Arctic nation)としての法的な立場を安定的且つ継続的に確保するため、グリーンランドとの協調関係をいかに構築していくか、ということを考えているようです。2008年にグリーンランドとともに共同開催した北極海会議(Arctic ocean Conference)は、その所信表明的なイベントとして位置付けられます。確認しておきたいのは、近年のデンマークが、グリー

ンランドとの間で、単方向的なニュアンスを伴う責任(ansvar)、決定(bestemmelse)、参加(inddragelse)、影響(indflydelse)にではなく、双方向性を印象付ける共同責任(medansvar)、共同決定(medbestemmelse)、協働(medinddragelse)、双方向的な影響(medindflydelse)に比重をおきながら、デンマーク国家としての権益確保を目指しているということです。デンマークは、①に対しても総じて前向き姿勢を見せていましたが、これもそうした姿勢に基づく政策選択の一つと考えることもできるかもしれません。

このようにして時事的な問題にのみ目を向けていけばいいほど、デンマークとの主従の関係を前提に、グリーンランドが認識の外側に置かれてきたとMarcussenが言う「過去」は、震んでいくような気がします。しかし、それが消えてなくなるなどという楽観的な見立ては到底成り立たないでしょう。もちろん、ある特定の歴史の局面だけを取り出して、支配や被支配を問題視することにも注意しなければなりません。その意味で、神谷さんにご指摘頂いた、北海道や沖縄の文脈を対比させていくことは、特定の歴史的拘束から距離をとりながら、その歴史に立ち返り、「わたし」たち一人一人の自己認識をアップデートさせていく絶好の機会になるのだろうと思っています。



ヌークの小学校



ヌークの小学校で日本紹介イベント

高橋美野梨 プロフィール

1982年生まれ。博士(国際政治経済学／筑波大学)。日本学術振興会特別研究員(DC2, PD)、オルボーアカデミー北極研究プラットフォーム客員研究員、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター助教などを経て、2021年より北海学園大学法学部政治学科准教授。主著にShinji Kawana and Minori Takahashi (eds.). Exploring Base Politics: How Host Countries Shape the Network of U.S. Overseas Bases. Routledge. 2021やMinori Takahashi (ed.). The Influence of Sub-state Actors on National Security: Using Military Bases to Forge Autonomy. Springer, 2019など。